経営者が語る
「経営の転機」
No.138

木造注文住宅中心に、地元に根差した事業展開
〝永く、安心して、健康的に〟本物の住まいを追求

立松建設 株式会社（代表取締役／一級建築士） 立松絹久

曾祖父の代から130年近く、木造住宅を手がけてきた通気断熱WB工法と耐震SE構法を融合させた革新的手法本物にこだわった家づくりで、厚いご支持をいただく

創業明治28年、4代にわたって建築業を営む

当社立松建設は、若き頃から大工を志し、修行に勤しんだ曾祖父・立松菊次郎（後に金次郎へと改名）が明治28年、名古屋の隣町であるここ大治（おおはる）町（ちょう）において独立を果たし、建築業を興したのがそもそものルーツとなります。地元の人たちから「大工の金さん」、「ダイキンさん」と親しみをこめて呼ばれるなど評判も上々で、繁盛していたそうです。

大正～昭和時代にかけては金次郎の息子、すなわち祖父・久一の代へと移ります。その久一ですが、何と奉仕、つまりボランティアで大工仕事を引き受けてしまうほどのお人好しだったとか。お客様から大いに喜ばれてはいたものの、それでは経営がうまく回るはずもありません。

ほどなくして代を引き継ぐことになる久一の息子である父・稔は、そんな経営の窮状を横目で見ながら、「このままでは立松建設がつぶれてしまいかねない。自分が頑張らなければ…」と、よりいっそう大工仕事に身を入れて励むようになります。折からの戦後復興期～高度経済成長期の追い風を受けて、新築の受注案件がどんどん舞い込むようになり、経営は安定軌道に。むろん、先代・久一の働きぶりや評判によるところも大きかったのだと思います。

私・絹久は大学卒業後、いったん総合建設業大手に就職し、技術職として土木事業に携わります。現場では、ひとつのプロジェクトを皆で協力してまとめ上げていくことの喜びと達成感に、大いに浸らせてもらったものです。約4年間という短い職務期間でしたが、かけがえのない時間を過ごさせてもらいました。27歳をもって退職し、家業の立松建設に入り直すことに。周りからは「安定した一流企業のサラリーマン生活を捨ててまで、なぜ?」という声もありました。しかしながら私自身としては、いわば既定路線。幼い頃から、いずれは継ごうと心に決めていた部分があり、それに従っただけのことでした。

一級建築士事務所登録、法人への組織替え

受注案件の設計や施工現場管理、お客様サービスへの対応など日常業務に忙殺されるなか時間を見つけながら勉強を続け、臨んだ一級建築士試験に合格し、資格を取得します。入社2年目の昭和61年、29歳のときでした。

同時期、三代目・稔の経営判断によって、法人「立松建設株式会社」への組織替えが実行されます。一級建築士事務所との二枚看板を掲げ、いかにも建築業らしい建築業をアピール。その効果もあって、受注活動活性化へと

結びついていったように思います。

平成元年を迎え、三代目から当主の座を譲り受け、四代目として経営の任に就くこととなります。まだ入社5年目の32歳。やや荷が重いようには感じたものの、腹をくくって引き受けました。根っからの職人肌であった三代目のことです。これでやっと、再び現場に専念できるとホッとしたような、そんな印象を受けたものです。

四代目に就いて早々、建築士目線も働かせつつ、「本物の家づくりとは何か」を改めて考え直してみることに。奈良の東大寺や五重塔に代表される歴史的な木造建造物たちは、なぜ数百年~1000年もの間、残り続けてこられたのでしょうか。共通点は、基礎である木材を腐らせないような工夫、すなわち湿気対策の徹底だったのです。

私どもの家づくりも絶対、それに見倣うべき。いわゆる在来工法(木造軸組工法)を用いながらも、随所に湿気対策を施すことで、100年住み続けられる快適な家を指向していくことに決めました。この姿勢には多くのお客様から共鳴・共感をいただき、社の業績にも好結果をもたらしてくれています。

先進工法・構法採用、お客様第一主義をさらに徹底

平成10年代半ばになった頃、「通気断熱WB工法」の存在を知ります。土壁の原理を応用、換気システムに頼らずとも、家自体が深呼吸するかのような仕掛けを施すことで結露を抑え、断熱性も高めることができます。夏涼しく、冬暖かい。まさに日本の風土にあった住環境を実現できる工法なのです。これはいける! そう直感して早速、採用・導入に踏み切ります。

続いて知ったのが、「耐震SE構法」でした。構造的に必要な柱や壁を少なく抑えつつ、耐震性の高い空間を実現できるのが特徴です。最低限の構造壁で基本設計(スケルトン)を施し、間仕切り壁を造作の壁(インフィル)で造っておくことにより、将来的に間取りを自由に変えられるのも大きなメリットです。これもいける! と考え、採用・導入を決めます。

2つの工法・構法を融合させた、私ども立松建設ならではの独自性豊かな手法によりお客様へ、木造注文住宅の〝これから〟を提案させていただいてきました。

いち早くホームページを立ち上げる、地元ケーブルテレビ番組にCMを流す、地域の要所に看板を出す、地元路線バスの車体後部に広告を出稿するなど、できる範囲内でのPRに努め、認知度向上を図ってきました。また営業面では、特にCG(コンピュータ・グラフィックス)を用いた設計プレゼンテーションに対し、「分かりやすい」、「イメージがつかみやすい」とご好評いただきました。

以上のような取り組みの成果もあってか、お問合せの電話件数ならびに事務所へのご来所件数とも順調に増え、商談成立へ至ったケースも続き

ます。そして名古屋をはじめとした地元愛知県内に加え、岐阜県内や三重県内においても実績を築き上げてきました。

コロナ禍不振を乗り越えて、いま反転攻勢へ

比較的順調に業績を伸ばしてきた木造注文住宅でしたが、新型コロナウイルスの襲来で、一気に落ち込みを余儀なくされてしまいます。住宅市場全体へのコロナ禍の影響はさほどひどくなかったようですが、私どもで手がける注文住宅の場合、お客様との対面で設計プレゼンテーションをさせていただいたり、ご要望をうかがって設計詳細を詰めていったり…といった手間がどうしても必要になってきます。そこが建売やプレハブなどと大きく異なるところです。コロナ禍による行動制限に伴い、肝心の対面でのやりとりを控えなければならなくなったのです。じっと我慢。最小限の新規受注件数、ならびに一般住宅のメンテナンスやリフォームなどで何とかしのいできたのが、ここ数年の実情です。

苦しめられてきたコロナ禍がようやく落ち着いて、私どもの事業の先行きにも再び光明が見え始めてきました。商談の舞い込み件数も回復傾向が顕著に。どうやって成約へと持っていけるか。いまが勝負の時だと自分に言い聞かせ、自身を奮い立たせています。

ご要望・ご希望のヒアリングから設計プレゼンテーション、設計確定、施工、引渡し、さらにはアフターフォローまで。お客様お一人お一人に密着した一貫サービスを提供できるのが、私ども立松建設の強みであろうと考えます。その強みを、お客様からの信頼へと結び付けていくべく、日々一生懸命に向き合ってまいります。

立松絹久 たてまつ きぬひさ

昭和31年生まれ、愛知県海部郡大治町出身。金沢大学工学部土木工学科卒。総合建設業大手に土木技術職として約4年間勤務後、59年、27歳にして家業承継を念頭に立松建設入社。木造注文住宅の設計、施工監督、お客様対応など日常業務をこなしつつ、一級建築士の資格に挑戦し、取得。平成元年、32歳にして父・稔から代を譲られ四代目（＝代表取締役）就任

社　　名	立松建設株式会社
代 表 者	代表取締役　立松 絹久
創　　業	明治28年
設　　立	昭和61年
事業内容	建築・不動産一般、一級建築士事務所
所 在 地	〒490-1143 愛知県海部郡 大治町砂子西腰掛畑1895
電　　話	052-444-2118
U R L	https://tatematsu-const.co.jp

取材協力：朝日生命 名古屋統括支社 千種営業所